

# 神戸大学「志」特別入試（理系型）志願者が提出する「活動報告書」からみた、高等学校における主体的活動の傾向

進藤 明彦, 西山 覚, 高橋 真, 吉田 健三, 杉山 浩一 (神戸大学)

2018 年度より実施してきた、学力の 3 要素を多面的・総合的に評価する「志」特別入試（大学入学共通テストを課さない総合型選抜）の 3 年間の志願者（工学部を除く理系）の活動実績（志願者が提出した「活動報告書」に記載されている主に高校時代の主体的活動）を 7 種類に分類し、その動向を分析した。その結果、理数系活動が 21.8%と最も多く、次に部活動が 19.6%であった。理数系活動に従事していた者のうち 36.5%が課題研究に取り組んでいた。また、COVID-19 の感染拡大防止により参加予定の活動が中止等の影響を受けたものは、ごく一部にとどまったが、中止のため参加できず記載されなかった活動もあると考えられ、実際には影響はより大きいと推測される。

キーワード：「志」特別選抜，総合型選抜，活動実績，課題研究，COVID-19

## 1 はじめに

2016 年 3 月に「高大接続システム改革会議（最終報告）」（高大接続システム改革会議, 2016）が示され、学力の 3 要素を多面的・総合的に評価する入試制度が求められた。中でも、学力の 3 要素の 1 つに関係する「主体性・多様性・協働性」は、これまでの大学入学者選抜では評価されてこなかった新しい観点であり、その評価が課題となっている。

そのため、その基礎的データとなる高等学校における生徒の主体的活動の動向を把握することは、評価の設計や改善において重要であると考えられる。

神戸大学では、2018 年度から学力の 3 要素を多面的・総合的に評価する大学入試センター試験を課さない AO 入試「志」特別入試<sup>1)</sup>を導入・実施してきた（進藤, 2021）。この入試では、志願者の高等学校時代の主体的な活動を評価するため、出願書類の 1 つに、最大 5 件の活動実績<sup>2)</sup>が記載できる「活動報告書」の提出を課してきた（神戸大学アドミッションセンター, 2020a）。

本稿では、工学部を除く理系 4 学部 7 学科（表 1）の 3 年間の志願者 203 名の活動実績のべ 902 件を、「生徒会活動、部活動<sup>3)</sup>、ボランティア、理数系活動、資格・検定、海外研修等、その他」の 7 種類に分類（表 2）し、今後の入学者選抜の改善や入試広報の基礎的データとして活用するため、志願者の高等学校における主体的活動の動向を調査・分析した。

また、2022 年度入学者から実施される新学習指導要領では、新しい科目として「理数探究基礎」、 「理数探究」などの探究的科目が新設されることや、2021 年度入試から「総合的な探究の時間」を履修した志願者が受験してくることから、課題研究<sup>4)</sup>等の探究活動<sup>5)</sup>に

ついても調査対象とした。

表 1 調査対象とした学部・学科の志願者数の推移

志入試 学部、学科、 専攻/コース	2018 年		2019 年		2020 年	
	募集 定員	志願 者数	募集 定員	志願 者数	募集 定員	志願 者数
国際人間科学部						
環境共生学科	5	14	5	17	7	12
医学部保健学科						
看護学専攻	2	8	4	4	4	9
検査技術科学専攻	2	2	2	8	2	13
理学療法専攻	2	8	2	8	2	11
作業療法専攻	2	0	2	5	2	5
農学部						
食料環境システム学科 生産環境工学コース	2	4	2	4	2	5
資源生命科学学科 応用動物コース	1	0	1	3	1	4
資源生命科学学科 応用植物コース	1	3	1	3	2	0
生命機能科学科 応用生命化学コース	1	5	1	2	1	6
生命機能科学科 応用機能生物学コース	3	5	3	6	3	2
海事科学部						
グローバル輸送科学科 航海マネジメントコース	5	7	5	10	10	4
グローバル輸送科学科 ロジスティクスコース	1	0	1	0	2	3
海洋安全システム科学科	1	0	1	0	3	3

注) 応用機能生物学コースの、2018 年募集時の名称は、環境生物学コース

また、2020年度の活動では、COVID-19の感染拡大防止のために中止等の措置がとられた活動があり、志願者数への影響に関する基礎データとするため調査の対象とした。

本稿において、工学部を調査対象外としたのは、学科ごとに出願要件や活動実績として記載できる内容が異なり、他の学部・学科と条件が異なり比較対象とならないためである。

「活動報告書」に記載された個人情報の利用については、神戸大学「志」特別選抜学生募集要項（神戸大学アドミッションセンター、2020b）において、「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」の遵守、「神戸大学の保有する個人情報の管理に関する指針」等に基づき、個人が特定できない形で入学者選抜や大学教育改善のための調査・研究等のために利用を行うことを志願者に示している。

### 1.1 本稿で扱う入試名称の統一について

神戸大学で実施してきたAO入試の正式名称は、改元と入試制度の改編時期が重なり、統一性のない名称となっている。実施時期を明確にするため本稿では、以下のような名称で扱うこととする。

- ・2018年度実施の「平成31年度神戸大学「志」特別入試」 → 「2018年志入試」
- ・2019年度実施の「2020年度神戸大学「志」特別入試」 → 「2019年志入試」
- ・2020年度実施の「令和3年度神戸大学「志」特別選抜」 → 「2020年志入試」

表2 主体的活動実績の分類

分類区分	主な活動
生徒会活動	生徒会長、生徒会活動、各種委員会、クラス委員等
部活動	運動部・同好会、理数系以外の文化部・同好会の活動、各種大会参加等
ボランティア	個人や各種団体のボランティア活動、各種大会におけるボランティア活動等
理数系活動	課題研究とその発表、理数系コンテスト・学会等発表、科学系オリンピック、理数系プログラム参加等、理数系部・同好会の活動
資格・検定	各種検定、民間の各種語学試験、危険物取扱者、無線技師等
海外研修等	海外研修、海外のフォーラム等への参加
その他	理数系以外の研修や各種の活動等

## 2 高等学校における主体的活動の実績と推移

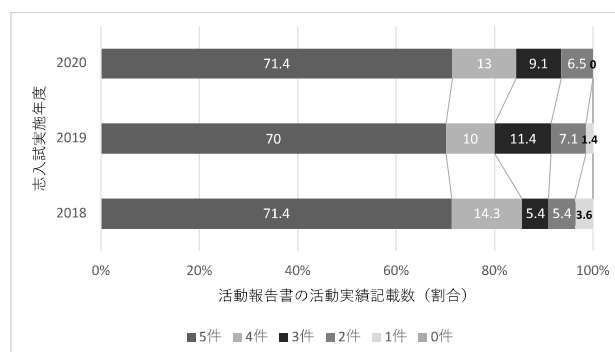
### 2.1 活動報告書の記載数とその推移

出願書類の1つである活動報告書には、活動を証明する書類の添付が可能な活動について、最大5件を記載することができる。2018年志入試からの3年間の活動記載数を表3に示す。また、志願者1人あたりの記載数の分布を図1に示す。

表3 各年度の活動記載数

	活動記載総数	志願者数	1人あたりの記載数
2018年	249	56	4.4
2019年	307	70	4.4
2020年	346	77	4.5
合計	902	203	4.4

表3及び図1に示されるように、各実施年度とも上限の5件を記入した志願者が7割、4件以上が8割以上を占め、3件以下は少なかった。また、選抜の回数を重ねることによる記載数の明確な変化は認められなかった。



記載数の上限の設定は、多く設定すると入試対策のため各種活動を増やす学校が出てくるのが懸念される。選抜の回数を重ねても傾向が変わらないという結果から、上限5件の設定は妥当であり、これから新たに高等学校における主体的活動の実績を選抜に取り入れる大学の参考資料になると考えている。

### 2.2 活動報告書記載の活動の種類とその推移

#### 2.2.1 活動実績の種別とその推移

2018年志入試からの3年分の活動報告書に記載された活動実績を、表2に示す7種類に分類し、その割合を図2に表した。また、実施年度ごとの割合を図3に示した。

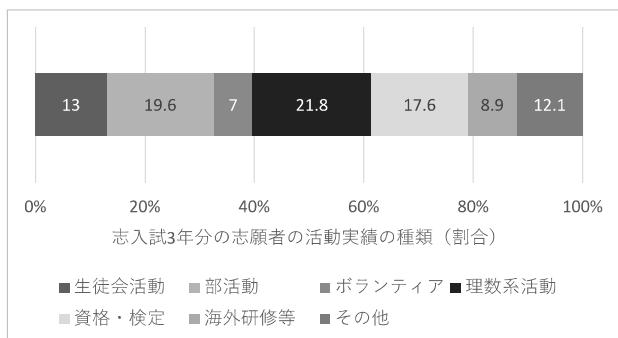


図2 志入試3年分の活動実績の種類別 (割合)

理数系の部・同好会の活動は理数系活動に分類し、部活動は運動部と理数系以外の文化部・同好会の活動とした。活動実績の中では、理数系活動が21.8%と最も多く、次いで部活動19.6%、資格・検定17.6%であった。理数系の学部・学科等の志願者であっても、理数系活動以外に、運動部や理数系以外の文化部に所属し、熱心に活動している者も多いことが示唆される。

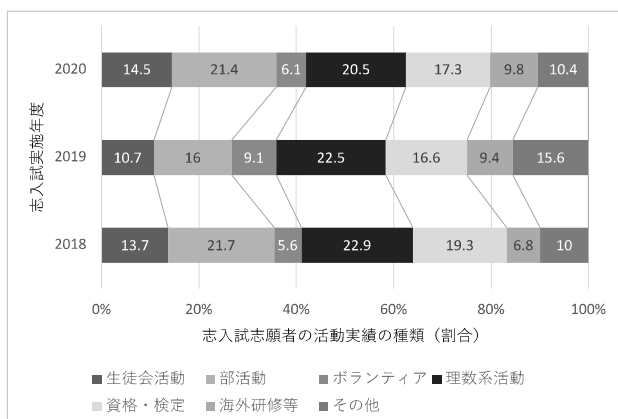


図3 志入試の活動実績の種類別 (割合) の推移

活動実績の種類別の年度ごとの推移は、図3に示されるように、一定の傾向は見られなかったが、各年度で、理数系活動、部活動、資格・検定の3つの割合が多い傾向がみられた。

### 2.2.2 志願者の活動実績の学部別比較

学部間での活動実績の比較を行うため、志入試3年分の活動実績を表2の種類別に分類し、その割合を図4に示した。

大まかな傾向として国際人間科学部環境共生学科と農学部において、理数系活動の割合が多い傾向がみられた。この2学部と比べ、医学部保健学科と海事科学部では理数系活動の割合が少ない傾向がみられた。

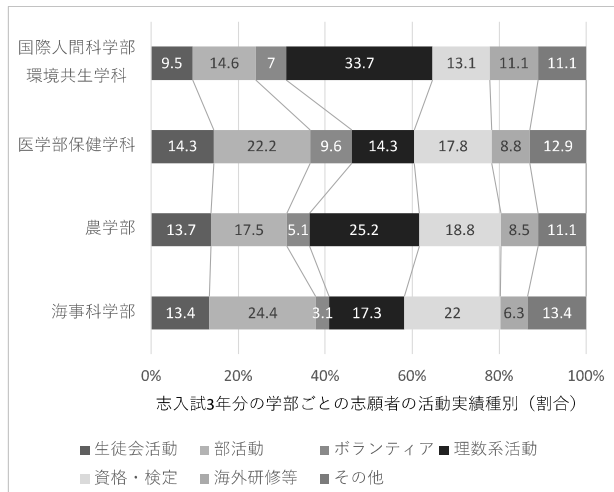


図4 志入試3年分の活動実績種類別 (割合) 学部比較

この結果は、海技士や医療系の国家資格取得を1つの目標とする理系学部の志願者にみられる傾向の可能性が考えられる。ただ現時点においては、母集団が20名程度と小さく、今後のデータの蓄積とインタビュー調査等による解析が必要だと考えている。

### 3 活動実績における課題研究

志入試3年分の活動実績における、志願者の学部ごとの課題研究に取り組んだ人数の割合を図5に示した。

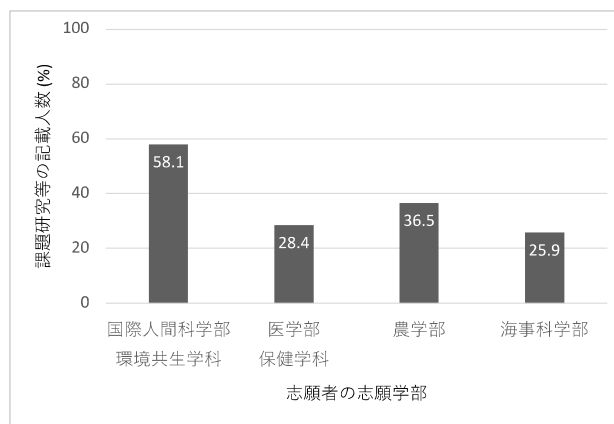


図5 学部ごとの課題研究記載の人数 (割合)

医学部保健学科と海事科学部に比べ、国際人間科学部環境共生学科と農学部の課題研究への取り組み者数の割合が多い傾向が見られた。

この傾向は、図4に示した理数系活動の割合の傾向とも一致していた。

これは海技士や医療系の国家資格取得を目指す学部と自然科学における真理解明に取り組む学部を志向する志願者の違いが関係している可能性が考えられる。

ただ現時点では母数が少なく、今後の傾向やインタビュー調査等と合わせて検討していく必要があると考えている。

最も割合の高い国際人間科学部環境共生学科は、前身の発達科学部人間環境学科の AO 入試において 2006 年から実施されてきたポスターセッション方式の選抜（中川，2006）が関係している可能性が考えられる。

また、この結果は、高等学校において必履修科目「総合的な探究の時間」において探究活動に取り組んだ高校生が受験してくる 2021 年度以降の入試と比較する基礎データになると考えられ、今後の動向と比較検討し、選抜の改善のための資料として活用したいと考えている。

#### 4 COVID-19 感染拡大の影響

2019 年度から 2020 年度にかけて、COVID-19 の世界的な感染拡大が報じられ、高校生を対象とする各種教育活動にも影響を及ぼしてきた。

2020 年志入試の活動報告書に記載されている活動実績から、COVID-19 の影響を受けた活動を分類したものを表 4 に示した。

表 4 COVID-19 の影響を受けた活動

種別	中止・延期	オンライン実施
海外研修等	2	0
海外研究発表	0	2
国内研究発表	2	0
コンテスト等	4	2
運動系大会	3	0
合計	11	4

注) 数値の単位 (件)

COVID-19 の感染拡大防止の観点から、中止や実施形態を変更した活動は合計 15 件あり、そのうち中止が 11 件、オンラインによる実施が 4 件であった。

影響を受けた活動は、活動実績総数の 1.7% と一部に限られている印象を受けるが、イベント等が中止のため参加できずに記載されなかった活動もあると考えられ、実際の影響はより大きいと推察される。中止 11 件のうち、7 件が 2020 年 2 月から 3 月に開催予定のものであった。これらは COVID-19 感染拡大に伴う 2019 年 3 月の世界保健機関(WHO)によるパンデミック宣言、第 1 回緊急事態宣言の時期に近いものであり、感染症に対する情報が十分ではなかった時期と一致し

ていた。対面による実施をオンラインに切り替えたイベント等の 4 件は、いずれも 2020 年 8 月開催のもので、COVID-19 に対する情報やオンライン実施の環境が確立されてきた時期のものであった。

2020 年志入試において、COVID-19 により中止や延期となった活動は全体のごく一部であり、活動報告書に記載された 1 人あたりの記載数平均も大きな変化はなく、志願者数も増加傾向にあることから、COVID-19 の影響は、ほとんどなかったと考えている。

次に、オンライン実施ができない海外研修について、2020 年志入試の活動報告書に記載されている活動実績から、開催年度別に分類したものを表 5 に示した。

表 5 海外研修の実施状況

海外研修実施年度	実施	中止
2018 年度	19	0
2019 年度	13	1
2020 年度	0	1

注) 数値の単位 (件)

COVID-19 の影響が全くなかった 2018 年度の海外研修の実施数が約 20 件であることから、各年度で 20 件程度の海外研修の活動実績が記載されると仮定すると、2021 年度末で COVID-19 が収束したとしても、2021 年度時点での高等学校第 1 学年～第 3 学年までは、海外における活動の制約を受けることが考えられ、一部の志願者の活動実績記載の内容には影響が出ることが考えられる。

国際性に興味関心の強い高校生に対して、各高等学校における海外研修の実施方法の改革が期待される。

#### 5 終わりに

今回の調査結果では、志入試 3 年分の活動実績の種別割合において、国家資格取得を 1 つの目標とする海事科学部と医学部保健学科において、理数系活動や課題研究の取り組みが、他の理系学部と比較して少ない傾向が認められた。現時点では母集団が小さく、今後のデータを含めて検討する必要があるが、高等学校における主体的活動の動向に関する基礎的データを蓄積し、その傾向を見きわめ、大学入学後の主体的活動や研究室配属後の研究活動等の追跡調査結果と比較検討することで、選抜方法や大学教育の改善に活かしていきたいと考えている。また、2021 年度実施の入試から、高等学校において「総合的な探究の時間」の探究活動を経験した高校生が受験してくることから、課題研究

等の動向には特に注目して、これまでのデータと比較・検討する必要があると考えている。

神戸大学における志入試の選抜状況の現状を考えると、より多くの志願者の確保は重要な課題であり、本研究の調査結果を入試広報の材料の 1 つに加え、新たな方策の検討に活用していきたいと考えている。

## 注)

- 1) 「志」特別入試: 2018 年度より、学力の 3 要素を多面的・総合的に評価する大学入試センター試験を課さない AO 入試として、7 学部 22 学科、コース・専攻を対象に実施。アドミッションセンターが実施する第 1 次選抜と各学部・学科が実施する最終選抜の 2 段階選抜。第 1 次選抜は、書類審査、総合問題 (理系型、文系型)、模擬講義・課題レポート (理系型、文系型) を課す。書類審査は、出願時に提出する調査書、活動報告書、志望理由書を多面的・総合的に評価。合否判定は全て学部・学科が行う。
- 2) 活動実績: 「志」特別入試の出願時に提出した、「活動報告書」に記載されている、1 人当たり最大 5 件までの高校学校等入学以降の主体的活動、高等学校入学以前からの継続した主体的活動 (医学部保健学科理学療法専攻および作業療法専攻、農学部生命機能科学科応用生命化学コースを除く)。
- 3) 部活動: 本稿では、運動部と理数系の部・同好会を除く文化部の活動とした。
- 4) 課題研究: 本稿では、高校生が興味関心に応じた課題を設定し、仮説・検証を繰り返し、結論を導き、発表を行う継続的な研究活動とした。主に理数科やスーパーサイエンスハイスクール、科学系部活動等で取り組まれてきた。
- 5) 探究活動: 本稿では、課題研究を含み、高校生が調査・体験活動を通して主体的に課題を設定し、情報収集・分析を行い、まとめ・表現する学習活動とした。

## 参考文献

- 高大接続システム改革会議 (2016). 「高大接続システム改革会議『最終報告』(平成28年3月31日)」 [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232\\_01\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf) (2021年12月1日) .
- 神戸大学アドミッションセンター (2020a). 「活動報告書/志望理由書」 [http://www.office.kobe-u.ac.jp/stdnt-examinavi/wp-content/uploads/2020/07/2021sibouriyuu-katsudouhoukoku\\_winn.pdf](http://www.office.kobe-u.ac.jp/stdnt-examinavi/wp-content/uploads/2020/07/2021sibouriyuu-katsudouhoukoku_winn.pdf) (2021年12月1日) .
- 神戸大学アドミッションセンター (2020b). 「神戸大学『志』特別選抜学生募集要項」 [http://www.office.kobe-u.ac.jp/stdnt-examinavi/wp-content/uploads/2020/07/2021kokorozashi\\_bosyuyoukou\\_0717\\_3.pdf](http://www.office.kobe-u.ac.jp/stdnt-examinavi/wp-content/uploads/2020/07/2021kokorozashi_bosyuyoukou_0717_3.pdf) (2021年12月1日) .
- 進藤明彦 (2021). 「神戸大学『志』特別入試 (第1次選抜理系型

受験) の概要と入学前教育の設計」『大学入試研究ジャーナル』 **31**, 1-8.

中川和道 (2006). 「ポスターセッションによる理系AO入試開始の経過と新しい科学者養成システムへの展望」神戸大学発達科学部 [http://www-2006.h.kobe-u.ac.jp/event/2005/symposium\\_20060321\\_report.pdf](http://www-2006.h.kobe-u.ac.jp/event/2005/symposium_20060321_report.pdf) (2020年3月26日).